

スマイル タウン

第332号

2025.3
発行

ひの社会教育センター は、市民のみなさまの
“やりたい”を実現し、「豊かなくらし」を応援する
施設として、1969年に日野市と勤社会教育協会が
協定書に基づいて設立しました。
今月もセンターで生きがいを築ける沢山の
市民の方々の活動をお伝えします。



おとな講座

ケーナ & サンポーニヤ

南米から伝わる
神秘的音色

- 対談コーナー「わたしたちの社会教育」
- 社会教育コラム（社会教育協会より）
- 表紙の講師は…ケーナ & サンポーニヤ TOYO 草薙先生
- ひの社会教育センターからのご案内・賛助会・寄付お礼等
- 職員・スタッフの『わたしのサステナブル』コーナー

『わたしたちの社会教育』③

職員同士の対談形式で『わたしたちの社会教育』を語る企画、今号は事業部長の渡邊和英に児童館職員の大久保杏菜が話を聞きます。

ひの社会教育センターでは職員の興味・関心から広がる出会いや交友関係から、イベントや事業につながるものが多くあります。事業を手掛けることに、どのような意義や価値、成果を期待して進めているのか？職員同士の対話をおし、社会教育施設の存在意義についても考えていきます。また、社会教育協会の理事の荒井文昭先生（東京都立大学人文社会学部人間社会学科教授）にも同席していただき、荒井先生の視点から講評をいただきます。

第3回テーマは、なぜ「八王子西特別支援学校での特別活動サタデースクール」に「ひの社会教育センター」が関わっているのか。

サタデースクールとは…

日時…2017年度より年間4回実施
会場…八王子西特別支援学校体育館
内容…児童・生徒の余暇活動の充実を目的とした、体操・運動のプログラム
参加者…当学校の在校生及び卒業生20名程（毎回変動）、保護者、教員、ボランティア（総計60名程）
主催…サタデースクール実行委員会（保護者有志団体による余暇活動）
担当…ひの社会教育センター職員渡邊

サタデースクールの活動について

大久保…サタデースクールが始まったきっかけからお聞きます。

渡邊…以前にサタデースクール実行委員会の代表をしていた佐々木美和さんから相談をいただき、始まった事業です。佐々木さんは、お子さんがひの社会教育センターの幼児事業に参加されていた、2〜3歳の頃からの成育過程の中で、お子さんの気になるところを相談しながら、子育て期を共に過ごしてき

ました。重度知的障害・自閉症のお子さんですが、現在20代になられているので、もう長いお付き合いです。

その佐々木さんが余暇活動であるサタデースクールの参加者に、ひの社会教育センターの社会教育を味わってもらいたいという思いから、「一緒に何か出来ないか」という相談につながったというのが始まりです。相談の中で、様々な特性を持つ集団に誰もが参加出来るのはスポーツが最適と考え、当時から運動の部門を担っていた私と、できることをまづやってみようという話になりました。

大久保…佐々木さんと渡邊さんとで一緒に立ち上げた形なのですね。それから8年程、依頼し続けてくれるのは、センターのどんなところがいいなと思ってくださっているのでしょうか。

渡邊…特別支援学校の子どもたちにも、公教育とは違った社会教育を体験する機会をという想いなのかな、と思っています。恐らくですけど、「自由」な部分が一つの価値として捉えていただいているのかなというのは感じていました。

サタデースクールを始めるにあたって、私自身も特別支援学校の体育の授業を見学させてもらいました。体育の授業とは違う形で、運動の楽しさを伝えられるかなと思い、プログラムを考えてきました。

大久保…私も活動を一緒に行う中、渡邊さんの指導は個人を大切に尊重しつつ、活動全体の楽しさや笑顔を大切にされているように感じています。

渡邊…体を自由に動かすことの楽しさを知ってもらいたいという点で、規律通り動くという楽しさもちろんあるけど、その中で規律通りの動きから脱線しても、それも楽しいよねという、自分が思う通りの行動をしても許容されるという経験を積めるよう、一人一人の発信する動きが良さとして捉えられるようなプログラムにしたいなと考えました。

大久保…例えば、プログラムの一つで、床に輪を並べて置いて、その一つ一つを片足や両足で跳んだり、色分けをして、○色の中だけ跳ぶとか、説明はするけど、みんな思い思いにやりますよね。輪は無視して思いっきり駆け抜ける子や、ゆっくり丁寧に跳んでいく子。一人一人に、渡邊さんがマイクを通してコメントをするので、そこから笑いが生まれ、会場全体が沸いたりする時があります。なかなか学校教育の中ではスポーツがあたりまえの子も、「出来た」という結果に注目されるだけではなく、自由でいいんだよと言われているように感じます。

渡邊…頭にシャツを被っている子がいたり、準備運動のとき寝転がっていても、今、そういう行動をしたいんだね、って話し掛けて、「絶対に列に並んで！」という指導ではなく、正解が「こっちが決めたものじゃない」というところを忘れないようにしています。

指導の中で、お手本どりに出来ることをゴールにしてしまうと、見ている保護者の方の中には、お子さんに忠実にやってもらいたいという思いを持ってしまおう方もいると思います。でも、私たち指導者が自由にやることを許容している姿勢を伝えることで、ここでは許されるんだなって、その部分のストレスが一つなくなっただけなんです。「なんでいつもこの子は思い通りにやってくれないのかな」って思うことも、この場では自由に動くことがむしろ価値だと言って、思えるような、寛容な環境作りは指導者として努めています。

大久保…毎回毎回肯定するっていう関わり方が、保護者の方の安心にも繋がったのかなと感じます。

運営しながら工夫してきたこと

大久保…サタデースクールの運営する中で不安だったことや、それを解消するための工夫はありますか？

渡邊…スポーツの楽しさを伝えることについては得意分野でしたが、一方で、障害児教育を専門的に学んでいないので、何をどう伝えればい

いかという点では迷いもありました。佐々木さんと協議しながら、適切なアプローチについて、いろいろアドバイスをもらいました。視覚的な見通しを伝えた方が安心できる子もいるので、プログラムを絵でわかるようにしたり。

あとは、年間4回の開催で、毎回ほぼ同じプログラム（挨拶・準備運動・走る運動・ボール運動・サーキットトレーニング・パラバールン）にすることで、初回はやらなくても、2回目、3回目の時に、「次のボールは参加しようかな」と変化してくる子もいるので、同じ内容を積み重ねて、参加する見通しがつくというのがいいというのも、佐々木さんからのアドバイスでした。

毎回同じ流れを積み重ねるプログラム

〈準備運動→走る運動→ボール運動→パラバールン〉



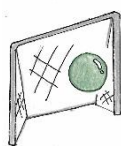
準備運動

心のウォームアップ



走る運動

ひとりひとりが目立つ場面を



ボール運動

選ぶ自由・表現の自由



パラバールン

みんなで気持ちを合わせて

〈イラスト・渡邊藍子〉

渡邊…障害のある方に限らず、小中高時代は「体育」で体を動かす時間がたくさんあります。卒業後、その時間が激減します。スポーツや健康をテーマに仕事をしている身としては、社会課題の一つで、問題だと感じています。

将来的に体を動かす重要性や価値を頭ではわかっていても、やっぱり心が理解していないと行動に繋がらないと思うので、身体を動かさないとモヤモヤするとか、そういう気持ち芽生えてくれると将来の運動習慣に繋がるのかな？ということも期待しています。自分としてはどんな人と関わる時も、運動することの楽しさを伝えていきたいと思っていますので、相手が子どもでも障害がある方でも同じです。そもそも体を動かすって本当に幸せなことだし、楽しいことだし、いいことだよっていう気持ち芽生えてほしいなど。もしかしら、佐々木さんが社会教育センターにお願いしてくれたのは、そこなのかもしれないです。

今後の展望

大久保…逆に渡邊さんがサタデースクールを通して得たことや、定例のスポーツ教室でも活かした、活かしていきたいということはありますか？

渡邊…サタデースクールが始まって2年位は手応えもなく、自分のやり方も不安から来る遠慮で硬かったのですが、一緒にやっている学生リーダーたちにも「らしくない」と言われながらやっています。そうして、サタデースクールの子



▲(左)きっかけをくれた佐々木りょうじさん



▲お手本はいつでも全力で!!
(上) 渡邊・(下) 大久保



◀左上より>職員の大久保、渡邊、荒井文昭先生

どもたちと関わっていく中で、言語でのコミュニケーションを持たない人とも、2、3年付き合えば続くと思慮疎通ができてくる実感があったことや、子どもたちも慣れきてて自由によつてくれることで、自分らしさを出しやすくなくて、彼らが私の緊張をほどこいてくれたところもあります。ボールを一つ持つて走るっていうルールなのに、スタート地点でボールをいくつも抱えてニコニコしている姿に「いくつ持つてるんだよう」(笑)と笑わせられます。

大久保…ボケとツツコミですね(笑)

渡邊…この仕事を通して、自分自身も社会教育を享受していると思っています。仕事しながら、いろいろな価値観に触れる機会も多くあり、仮に別のところでスポーツ指導者になつていたら、こんないろいろな幅広い人たちに関わることもなかったと思います。どうやってこちらの思いを伝えられるか、という工夫も常に学んでいます。

特性を持つ人たちとの関わりの中、言葉じやなく、こちらの思いを表情や身振り手振りで表したりするのは、自分自身が身につけた、新しいスキルでした。年を重ねると自分の価値観がどんどん研ぎ澄まされていきます。それはいいことですが、研ぎ澄ます部分と新しい価値観を受け止めて膨らませていく部分との両輪であるのが、人間としての豊かさになるのかなと思ひながら…精進していきます!(笑)

また、いつも一緒に活動する学生を中心としたリーダーたちがいて、20代の彼らにとつても、インクルーシブ教育の視点でサタデースクールでの経験は大きな価値になると思います。チームメンバーである彼らのサポートがあることも、継続できた1つの要因なので、最後にこれからも一緒によろしく!と伝えたいです。

大久保…私も頑張ります!

【荒井先生からの講評】

渡邊和英さんの話しに、新人の大久保杏菜さんが質問するのを聞かせていただき、今回も私は多くの示唆をいただきました。

子どもの成長過程を共有してきたからこそ形成される信頼感が、社会教育センターに通う参加者と職員のあいだに形成されていることもその一つです。お子さんが2歳から20代になるまでの間、子育ての悩みをともに過ごしてきた中で培われた信頼関係があったからこそ、「学校に通う子どもたちにも、ひの社会教育センターの社会教育を」という思いが、サタデースクールの実現に結びついたことを教えていただきました。また、「様々な特性を持つ集団に誰もが参加出来るのは、スポーツが最適」という渡邊さんのセンスに驚かされました。しかし、スポーツには規則から脱線することの楽しさもあり、またそれこそが価値になる環境づくりが大切、との指摘には深くうなずくほかありませんでした。大久保さん自身も、センターの仕事を通して「いろいろな価値観を身につけられる」楽しさを話しておられたことも、すてきでした。

【社会教育】



ひの社会教育センターと新潟県十日町市下条地区との交流が30年を迎えたのを機に、2月8日に記念行事「ひの社会教育センター・ひのスノーマンと四季の風交流30周年を祝う会」が十日町市内で開催されました。当日は寒波襲来で新潟県内は2mを超える雪に見舞われ、果たして現地入りできるのか危ぶまれる天候でした。そんな中、日野から参加したメンバーも車に分乗して何とかたどり着くことができ、現地の皆さんと共に30年のあゆみを振り返り分かち合うひと時となりました。

自主グループ「ひのスノーマン」が初めて十日町の雪まつりで雪像づくりに参加したのが1992年。以来、雪像づくりは毎年の恒例となり、現地のチームと競い合いながら素晴らしい作品の数々を生み出してきたことが、当日配布された記念誌を見るとわかります。一方、下条地区からはセンターの秋まつりバザー(現在は「てとてフスタ」)での特産品販売や「下条つ子ミニ留学」などの事業で世代を超えた住民の方々が日野を訪れ、互いに交流を深めてきました。

毎年、日野のメンバーが現地入りすると「おかえり!」と「ただいま」といった会話が現地の方々との間で交わされるといいます。長く交流が続いている秘訣は、こうした「お客様扱いしない」「友達づくり」というスタンスに徹してきたことでしょうか。二代目、三代目のメンバーも活躍を始め、交流の輪はこれからも広がっていきます。

星野一人(公財)社会教育協会事務局長

表紙の講師は…

【ケーナ & サンポーニャ】第2・4木曜日(18時半～20時半)

講師 TOYO 草薙 (トヨ クサナギ)先生

日本を代表するフォルクローレ演奏家、TOYO 草薙先生。

25 年続くこのクラス、そもそものお付き合いの始まりは、このクラスの前身の「ケーナ」教室を、担当していたペルー人の先生が急に辞められたあとの、代理で呼ばれたというのが草薙先生だったそうです。

本場南米の伝統的な奏法から現代音楽に至るまで広く網羅し、2000 年より「ケーナ研究会」を設立、日本各所にお弟子さんがいらっしやり、後進の育成にも力を注ぐ熱意あふれる先生です。

30 代で南米ボリビアに渡ったとき、本名のファーストネームがなかなか覚えてもらえなかったことで、自分は東洋人だから、「トーヨー」→縮めて「トヨ」としたら、覚えてもらえるようになったことが、現在のお名前の由来。

日本での音楽活動は、演奏会や指導者として全国を飛び回り、コンサートや、楽曲の制作など多岐にわたります。

→ケーナはサイズが変わると、音域が変わる



そんな草薙先生に、言葉を選ばず「なんで、そんなすごい方が、こんな東京の端まで 25 年も来てくださっているのでしょうか!？」と聞いてしまいました。

『不思議なんだよなー、もう腐れ縁だよな』と笑顔で話す先生。『プロ弦楽器奏者の伴奏で演奏して、みんなも楽しいと思うので、私も楽しいですよ。みんなも2週間に一度、ここで思い切り演奏して、ストレス解消になっているかな。私もライフワークになっているので、うまく成り立っているんじゃないかな』と。

『これからも喜んでもらえるように、良い曲をたくさん作り続けるので、ついてきてください。アンサンブルしながら、一緒に楽しみましょう』というメッセージをいただきました。



—教室の様子—

常時、7～8名が在籍し、長く続けている方も多いクラス。この日も順番に演奏したい曲を伝え、全員でのアンサンブルを楽しんでいました。先生は、ギターを抱え伴奏し、会員さんは、曲に合わせ、ケーナやサンポーニャを持ち替えたり、時にはチャランゴを演奏したり、それぞれの楽しみ方で楽器を奏でます。アンサンブルで織りなされる音色は耳心地よく、異国の風景が目に見えそうです。

また会員さんが使う楽器のほとんどを先生が手作りしているそうで、先生の大きな愛を感じます!

ひの社会教育センターからのご案内

【手作り、長持ち? 安上り?】

昨年 4 月に社教センターに入団しました東部会館の事務局長・杉山亮平と申します。さて、私の職歴ですが 8 割くらいの期間を製造業(造形模型製作)に関わってきました。それもあって自宅や施設の家具類(机・棚など)は手作り品が多くなっています。

まず「安上り?」ですが、そんなことはありません。ちゃんとした素材で作ればそれなりにしますし、工具の購入等も考えればトントン以上かなと思います。それなのになぜ作る? 一番のメリットはちょうど良く仕立てられるということです。サステナブルな行動のひとつ、「一つの物を長く使う」でいうと、スペースに合わせられるので余計な買替えをしなくて良い、必要に応じて拡張できる、また素材や作りが分かっているので、手入れをしながら使えるということになります。自分で作った物は愛着が湧いて多少出来が悪くても可愛くなってきます。我慢せずに物を長く使うには「手作り」をお勧めします。楽しいですよ。〈職員: 杉山〉



▲自宅で愛用中、手作りの三本脚の机と 職員の杉山

◎クリーニングデイ出店者募集

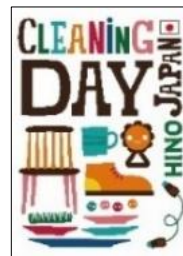
日 時: 2025 年 5 月 18 日(日)11:00～17:00

場 所: てとてお広場とその近隣(多摩平 3-1-1)

参加費: 1,650 円/1 ブース

クリーニングデイとは…フィンランド発のリサイクル・カルチャー・イベント。コンセプトはアップサイクル。

古い不要なモノに新しい価値(ストーリー)をつけ、生まれ変わらせる。いらないモノなら何でもいいのではなく、自宅にあるモノの中から、次の誰かに使って欲しいモノを丁寧に選び、気持ちを込めて販売してみませんか?



賛助会へのご協力ありがとうございます ★順不同・敬称略

- ①個人会員 1口 1,000 円
田中徹・洋子 10口 長井節子 5口
松永義希・伸子 10口 小林裕子 3口
佐藤真和 10口 山下久美子 3口
稲垣眞弓 3口 渡邊邦江 1口 和田三枝子 1口
- ②団体会員 1口 5,000 円
東京プロバスクラブ 2口
手話ダンスカワセミ 1口
全国勤労者スキー協議会 1口